

自然的かつ「独特」な概念能力 —マクダウェルの「第二の自然」の批判的検討—

Natural and *Sui Generis* Conceptual Capacity
—On McDowell's “Second Nature”—

川 瀬 和 也

ジョン・マクダウェルは、『心と世界』において、我々人間の概念能力は「第二の自然」であり、法則の領域に属さない「独特の」ものでありながら、同時に自然的なものでもあるという議論を展開している。本論文では、過激なプラトン主義、簡素な自然主義、非法則的一元論という三つの立場との違いを整理することで、「第二の自然」がどのような主張であるかを明確にする。その上で、「第二の自然」をマクダウェルの静寂主義的な傾向の発露として理解できることを指摘する。さらに、物理主義の側に立って、マクダウェルからの批判に対する応答を試みる。

キーワード：ジョン・マクダウェル、第二の自然、陶冶、静寂主義、自然主義、物理主義、ドナルド・デイヴィドソン、非法則的一元論

目 次

- I 序論
- II 過激なプラトン主義と簡素な自然主義への批判
- III 非法則的一元論への批判
- IV 静寂主義としての「第二の自然」
- V 物理主義における自然概念
- VI 結論

I 序論

『心と世界』で提示されたJ. マクダウェルのプロジェクトは、「第二の自然の自然主義」と呼んで差し支えないだろう。「第二の自然」や「概念能力」といった諸概念が重要な位置を占める彼

の議論は、メタ倫理学と知覚論が巧みに接合されたものであり、多くの読者の関心を喚起してきた。しかし、第二の自然の自然主義のプロジェクトについての彼の説明は必ずしも明確とは言えず、様々な批判が提起されている。

本論文では、第二の自然の自然主義において何が主張されているのかを、彼が批判している立場との関係を整理しながら明らかにする。さらに、従来の批判者たちが気づいていないマクダウェルの議論の問題点を明確にし、マクダウェルとは異なる解決の可能性を探る。

以下ではまず、マクダウェルの議論を再構成した上で、彼の立場と、彼が批判する立場との相違がどこにあるのかを明確にする。このとき、まずは「簡素な自然主義」と「過激なプラトン主義」の両者との対決に着目する(II)。次に、D. デイヴィドソンの非法則的一元論との関係を整理する(III)。その後、第二の自然の自然主義に対する可能な批判や、過去に実際にそれへと向けられた批判を検討し、それらに対してマクダウェルの側からいかに応答できるかを論じる(IV)。最後に、マクダウェルやその擁護者、過去の批判者達が見落としている、彼の議論の問題点を明らかにする(V)。

II 過激なプラトン主義と簡素な自然主義への批判

本節では、マクダウェルの第二の自然の自然主義がどのような立場であるのか、マクダウェルの議論を再構成しつつ明らかにする。マクダウェルは、『心と世界』第四講義において、「簡素な自然主義」とデイヴィドソンの非法則的一元論とに対する自らの立場として、第二の自然の自然主義を導入する。しかしそれに続く箇所では、非法則的一元論への言及は消え、第二の自然の自然主義は、簡素な自然主義と過激なプラトン主義との両者に対立するものとして描き出される。こうして、マクダウェルの説明は奇妙に二重化されている。この二重化は、彼の立場の理解を容易ならぬものになっている。実際、一方でC. ハルビッツは前者の、非法則的一元論と簡素な自然主義との対立の中でマクダウェルの立場を捉えようとし、他方でC. ライトやH. フィンクは、後者の、簡素な自然主義と過激なプラトン主義との対立のみに着目してマクダウェルの立場を理解しようとしている(Halbig 2008; Wright 2002; Fink 2008)。

本稿では、マクダウェルの提示する順序とは異なるが、まずは簡素な自然主義と過激なプラトン主義の両者に対立する立場として、第二の自然の自然主義が位置付けられていることを確認する。その後、節を改めて、デイヴィドソンの非法則的一元論とマクダウェルの立場の関係を考える。

ここで予め、「法則の領域」と「理由の空間」という、マクダウェルが前提する対立構造について説明しておこう。法則の領域は、我々人間による概念的な把握を伴わない、物質的自然が支配する領域である。典型的には自然科学の対象とされる客観世界がこれに当たる。これに対し、理由の空間は、我々人間が概念能力を行使して把握するものであり、そこで概念から構成された

諸命題が互いを正当化しあうような場所である。両者の内実や、これらを措定することの妥当性、形而上学的身分等については議論の余地があるが、ここではさしあたり以上の大まかな理解にとどめておく。

さて、第二の自然の自然主義の位置付けを正しく理解するには、マクダウェルが次の二つの命題を守ろうとしていることを明確にしておくことが有効である。

1. 自発性と受容性によって構成される人間の概念能力は、法則の領域に位置を持たない「独特の」ものである。
2. 概念能力は、自然的なものである。

これを念頭に置けば、簡素な自然主義と過激なプラトン主義の各々がマクダウェルの立場とどう関係するかを理解するのは難しくない。前者は一つ目の、後者は二つ目の命題に抵触するのである。マクダウェルのプロジェクトの最大の特徴である第二の自然という考え方は、これらを両立させるために導入される。

順番が前後するが、過激なプラトン主義から考えてみよう。マクダウェルによれば、過激なプラトン主義は、人間の概念能力の独特さを強調するあまり、概念能力が働く理由の空間を、「特殊に人間的ないかなるものからも独立に構成されているという意味で自律的な構造」だと考えようとする (MW, 77)。ここで、人間的なものから独立であるということは、自然的でない、超自然的なものであるということの意味しているように思われる。そうだとすると、理由の空間は超自然的なものであり、それにアクセスする能力としての概念能力も、超自然的なものであることになってしまう。したがって、過激なプラトン主義は、後者の命題に抵触する。

次に、簡素な自然主義を見てみよう。マクダウェルによれば、「このアプローチの着想は、自発性に関して語られることに、何らかの真理があるのだとすれば、自発性は、そのように〔法則の領域として〕とらえられた自然の中での事物の位置を表示することにその根本的な役割が存しているような諸術語において捉えられるのでなければならない、というものである」。また、「このアプローチによれば、理由の空間の構造は、既に自然科学的な自然の描写に属しているような、概念的な素材によって再構成されうることになる」(MW, 73)。

このように定式化された簡素な自然主義と、先ほどの二つの命題との関係を考えてみよう。まず明らかなのは、この立場においては、第二の、概念能力は自然的なものである、という命題は認められるはずだということである。

しかし、簡素な自然主義は、第一の、「受容性と自発性の二つの契機から構成される人間の概念能力は、法則の領域に位置を持たない「独特の」ものである」という命題に抵触する。簡素な自然主義の眼目はまさに、マクダウェルの言う法則の領域に位置を占めるものとして、世界の全ての事象を説明することにあるからである。したがって、概念能力が「独特の」ものであり、法

則の領域に位置を持たないということは、簡素な自然主義にとっては認められない。

以上のことが理解されるならば、マクダウェル自身の立場である第二の自然の自然主義は、過激なプラトン主義から第二の命題を守り、簡素な自然主義からは第一の命題を守ることができる立場として提示されているということがわかる。この立場では、第二の自然として、概念能力は、第一の自然たる法則の領域に対して「独特の」ものである。しかし、それでもなお第二の自然は「自然」なのだから、概念能力は自然的であり続ける、ということになる。

III 非法則的一元論への批判

第二の自然の自然主義が、簡素な自然主義と過激なプラトン主義の両者に対立する、という図式は比較的理解しやすい。これに比べて、非法則的一元論と第二の自然の自然主義の関係は複雑である。本節では、この関係を整理し、マクダウェルの主張をより明確にする。

非法則的一元論とは、デイヴィドソンによって提唱された、心的出来事と物的出来事との間のトークン的な同一性を認めるが、心的に記述された出来事と物的に記述された出来事との間の法則論的連関を認めないという立場である (Davidson [1970] 2001)。マクダウェルは、デイヴィドソンの出来事に関するトークン同一性の主張を彼の言葉で言い換えて「独特の概念を充実するものが因果的に連結されるのは、それらが法則の領域の中にも位置を占める場合に限る」という主張をデイヴィドソンに帰す (MW, 75)。ここでは、出来事の心的な記述が「独特の概念を充実するもの」と呼ばれている。そして、この心的に記述された出来事が物的に記述された出来事とトークン的に同一であるということが、「法則の領域の中にも位置を占める」と表現される。また、ある出来事の心的記述が、物的記述とタイプ同一ではないために、心的に記述された出来事と物的に記述された出来事との間に法則論的な関係は成立しない、というデイヴィドソンの主張は、マクダウェルの表現では、「独特の概念を充実するもの〔出来事〕がそれを充実することが、その充実するものの法則の領域における位置を開示しない」となる (MW, 75)。

『心と世界』でマクダウェルはデイヴィドソンの主張を退ける議論を展開しているが、この議論を正確に理解するには、非法則的一元論について論じた「機能主義と非法則的一元論」を参照することが有効である。この論文では、彼は『心と世界』とは逆に、ロアーによる機能主義的な観点からのデイヴィドソン批判に対して、デイヴィドソンを擁護している。しかしこれは決して、この論文と『心と世界』の間で彼が大きく立場を変えたことを意味しない。機能主義を退けた後の、彼のデイヴィドソン評を見よう。

マクダウェルは、「デイヴィドソンの心の哲学が二つの際立った構成要素として、非法則主義と(出来事についての)一元論とを持つ」と指摘する。その上で彼は、「私は前者のみを支持している」と宣言する (McDowell [1985] 1998, 339)。

マクダウェルが非法則主義を支持するというのは、決して驚くべきことではない。デイヴィッドソンの合法的な非法則主義は、概念能力が「独特の」ものである、というマクダウェルの主張と重なる。『心と世界』で、デイヴィッドソンの非法則主義に関する主張が、「独特の概念を充実するもの〔出来事〕がそれを充実することが、その充実するものの法則の領域における位置を開示しない」と表現されていたことから、これは明らかである。

これに対して、デイヴィッドソンが支持する出来事のトークン一元論は、マクダウェルにとっては受け入れがたいものである¹。マクダウェルによれば、この主張が誤っているのは結局のところ、「因果性の法則的性格の原理」に囚われているからである。マクダウェルはこの原理を「経験主義の第四のドグマ」とまで呼んで、強硬に退けている (McDowell [1985] 1998, 340)。

『心と世界』では、出来事のトークン同一性の主張は、「独特の概念を充実するものが因果的に連結されるのは、それらが法則の領域の中にも位置を占める場合に限る」という主張だとされていた。マクダウェルが非法則主義を支持しながら出来事のトークン同一性だけを否定するという以上の整理が正しいとすると、マクダウェルが非法則的一元論を退けるのは、このトークン同一性の主張のゆえだということになる。それでは、なぜこの主張は退けられるのだろうか。

これを明らかにしているのが、以下の難解な一文である。

何かが自然的であるその仕方とは、法則の領域におけるそのものの位置のことである、ということに異議を唱えるのでない限りは、感受性が自然的であるという事実と、自発性の概念が理由の空間において機能するという事実とが一緒にはたらくと、自発性が感受性それ自体の行使にまで浸透しているという可能性が締め出されてしまうことになる。(MW, 75)

ここで述べられていることを再構成しよう。ここで提示されているのは、次に示すA、B、Cから、結論Dを導く推論である。

- A) 何かが自然的であるその仕方とは、法則の領域におけるそのものの位置のことである。
- B) 感受性は自然的である。
- C) 自発性の概念は理由の空間において機能する。
- D) 自発性が感受性それ自体の行使にまで浸透しているということはない。

自発性が感受性それ自体の行使に浸透していないという結論は、概念能力が自発性と感受性から

¹ マクダウェルにとって、出来事に関するトークン一元論を否定することと、デカルト的二元論を支持することは別のことである (McDowell [1985] 1998, 339)。

構成されておらず、自発性のみの働きとして理解されるということの意味している。これは、本論文では直接扱わないが、『心と世界』前半の議論において、「所与の神話」に陥るとして否定されている見解である。

この、マクダウェルにとっては受け入れられない結論へと導く前提のうち、BとCをマクダウェルは支持している。Bでは、概念能力を構成する感受性が自然的であることが述べられているが、これは、概念能力が超自然的であることを嫌って過激なプラトン主義を退けたマクダウェルが受け入れるはずの前提である。Cでは、自発性の概念が理由の空間の中で働くと言われているが、これもマクダウェルの主張そのものである。

したがって、マクダウェルが否定するのは前提Aである。そもそも、引用文においては、これに異議を唱えるのでない限りは困ったことになる、という言い方がなされていた。マクダウェルはまさにこれに異議を唱えるべきだと考えているのである。

以上が正しく理解されれば、出来事のトークン一元論をマクダウェルが否定する理由も明確になる。トークン一元論は、「独特の概念を充実するものが因果的に連結されるのは、それらが法則の領域の中にも位置を占める場合に限る」という主張であった。この主張と、「何かが自然的であるその仕方とは、法則の領域におけるそのものの位置のことである」という主張は完全に同一というわけではないが、マクダウェルはおそらく両者を同等のものとして扱っている。すなわちここでは、「概念能力は自然的であり、例えば身体運動と因果的に連結されるのだが、これが可能なのは、概念能力が法則の領域に位置を占めている場合に限られる」という主張が、デイヴィドソンのトークン一元論の内実だとされている。これは、トークン一元論の根底に「因果性の法則的性格の原理」があるとしていた「機能主義と非法則的一元論」でのマクダウェルの見解とも整合的である。

以上によって、マクダウェルによる非法則的一元論への両義的な評価の全容を明らかにすることができた。マクダウェルは、非法則的一元論のうち、心的なものの非法則性に関する主張は、概念能力は「独特の」ものであるという自らの主張と重ね合わせながら支持する。しかし、出来事のトークン一元論に関する主張は、自発性と受容性から構成される概念能力が自然的であると同時に「独特の」ものであるということの否定に繋がるがゆえに否定されるのである。

IV 静寂主義としての「第二の自然」

これまで、マクダウェルの議論が、彼が批判する他の立場とどのような関係に立っているのかを明らかにしてきた。しかし、これらの議論は、マクダウェルと他の立場の違いを際立たせるものに過ぎず、マクダウェルが解決策として掲げる第二の自然の自然主義の正しさを示すものではない。

また、第二の自然の自然主義はそれ自体、それほどもっともらしい立場ではない。マクダウェルは第二の自然は自然的であり、同時に法則の領域に位置を持たない「独特」のものだと言うが、そのような第二の自然など本当に存在するのだろうか。

ここで一見すると、この疑念を晴らせるか否かは、第二の自然としての概念能力が、本当に自然的だと言えるのか、ということにかかっているように思える。彼への批判も擁護も、この点に関わるものが多くある。そして、この問題に関わるものとして導入されているように思えるのが、「陶冶」の概念である。そうすると問題は、「陶冶」概念は本当に、第二の自然が自然的であることを保証するのか、となる。

この見通しに沿って、「陶冶」概念をめぐるマクダウェルの議論を追ってみよう。マクダウェルは、アリストテレスの倫理学の解釈に基づいて、行為の理由という実践的・倫理的な認知の場面での概念能力に関して、以下のように述べる。

倫理的な性格を形成すること、これは実践的な知性に特定の形を与えるということを含んでいるのだが、それは、以下のより一般的な事象の特殊事例である。その事象とは、概念能力へと入るための成人儀礼であって、この概念能力は倫理の合理的な要求だけでなく、それ以外の合理的な要求への応答性も含んでいる。こうした成人儀礼は人間が成熟へといたるところの標準的な部分をなしている。そしてこのことは、理由の空間の構造が、法則の領域として捉えられた自然の配置とはかけ離れているにもかかわらず、過激なプラトン主義によって予期されたような人間からの隔絶に依存してはいない、ということの理由である。

(MW, 84)

さらに、マクダウェルはこれと同型の議論を認識一般へと拡張する。

アリストテレスが倫理的な性格の形成を捉えたその仕方を一般化するならば、人は第二の自然を獲得することによって理由一般へと開眼する、という考えへと到達することになる。私はこの考えを一言で言い表す英語の表現を知らないのだが、これはドイツ哲学で陶冶として現れるものである。(MW, 84)

倫理的な領域において「しつけ」や「成人儀礼」と呼ばれたものが、認識一般に関しては「陶冶」と呼ばれている。これらは、「人間が成熟へといたるところの標準的な部分をなしている」のであり、また「第二の自然を獲得することによって理由一般へと開眼する」ということを意味している。マクダウェルは、これによって概念能力が自然であるということが示されたと考えているようである。この説明は、どのように評価されるべきであろうか。

詳論に入る前に、陶冶(Bildung)という概念の出自について簡単に述べておきたい。マクダウェ

ルは『心と世界』において度々ヘーゲルに言及している。また、ヘーゲルの『精神現象学』は教養小説(Bildungsroman)に擬せられることがある。これらのことから、マクダウェルが用いる陶冶の概念は、ヘーゲルに由来すると言われることがある。例えば、R. J. バーンスタインは、マクダウェルにおけるヘーゲル的なものについて検討する中で「人間の本性の理解において陶冶に中心的な位置を割り当てたのはヘーゲルである」と述べて、この概念をヘーゲル由来のものとして理解しようとしている(Bernstein 2002, 18)。また、松岡健一郎も、「マクダウェルの場合、ヘーゲルは、人間が判断や推論を行う際の諸々の理由からなっているネットワークを表す「第二の自然」という概念に結びつけられている」と指摘している(松岡 2017, 96)。

しかし、マクダウェルがヘーゲルの名前を挙げて実質ある議論を展開している箇所は、『心と世界』においても、また、より最近の、『世界を視野に収めること』(2009)においても、概念能力が自発性と受容性の両方を契機として含みこむことで客観的に妥当する、ということを描き出す場面に限られている²。確かに、『心と世界』では、カントに第二の自然という観点が欠けていることと、ヘーゲルが「カントという巨人の肩の上に立つ」ことを成し遂げた哲学者であるということが、同じページで指摘されている(MW, 111)。しかし、ヘーゲルと第二の自然を結びつける唯一の根拠と思われるこのページにおいてさえ、ヘーゲルの名前と第二の自然の間には、同じページで両者がカントと結びつけられているという間接的な関連しかない。しかも、そこでは「陶冶」概念への言及は全くない。

これらのことから、ヘーゲルと「陶冶」や「第二の自然」との結びつきは、せいぜい間接的なものだと考えられる。そもそも、R. ブプナーが正しく指摘しているように、陶冶の概念はヘーゲルの『精神現象学』だけでなく、ヘルダーやフンボルトらの思想を含むより広い18・19世紀のドイツ哲学の流れの中で重要な役割を果たしてきたものである(Bubner 2002, 211)。マクダウェルも、ブプナーへの応答論文で、陶冶概念を単に「近代の概念」と呼ぶことで、この指摘を追認しているように思える(McDowell 2002, 296)。

これらのことから、少なくともマクダウェルが直接にヘーゲルに負っているのは、陶冶概念ではなく、後のマクダウェルの言葉で言えば「主観と客観のいずれもが他方に先立するというものがない、両者の正当なバランス」を重視する考えに限定されていると結論できる(McDowell [2003] 2009, 152)。これに対し、陶冶概念は、ヘーゲルにも間接的に関わってはいるが、むしろヘルダーに端を発する発想を緩やかに指して用いられていると考えるべきである。

さて、陶冶概念の内実の検討に戻ろう。ライトは、「最も意欲的で開かれた心を持った読者ですら、第四講義における説明から、この問題についての十分に明確な理解を見出すことは不可能

² 例えば、MW (83) , McDowell([2003] 2009, 152-3), McDowell ([2008] 2009, 183-4)を参照。

なのではなかろうか」と苦言を呈している (Wright, 154)。これは、マクダウェルの漠然とした説明に対する当然の反応であろう。マクダウェルの側から、この批判に答えることは可能だろうか。

これに対して、おそらくは「最も意欲的で開かれた心を持った読者」の一人であるハルビッチは、法則の領域としての自然と、第二の自然とがどのように接続されるか、という問題に関わるものとして陶冶の概念を理解しようとする。彼は、陶冶の概念によって名指されるプロセスによって、ある「法則の領域の一部をなすような潜在性の集合」が「第二の自然へと変形され」るのであり、またこのような「潜在性の集合」によって、「第二の自然が法則の領域としての第一の自然の中に取り込まれるということが保証される」、という方針の議論を、マクダウェルに読み込める、と言う³ (Halbig 2008, 78)。

ところが、このようなハルビッチの試みに対するマクダウェルの態度は冷淡なものである。マクダウェルは、ハルビッチの「第一の自然と第二の自然はいかに接続されるのか」という問い自体がそもそも重要でないとする。そのうえで、他の論文でこうした問いが生じるかのように思われる言い方をしてしまったことを認め、以下のように述べている。

私は、第二の自然的なものも第一の自然と同様に自然的である、という明白な主張だけをすべきであった。両者が自然的であるということ以上に、それらの間の接続を作り出そうなどと言い出す必要はなかったのである。(McDowell 2008, 221)

これによれば、第二の自然と第一の自然の間には、両者とも自然的である、ということ以上の関係は全くない。この主張を重く受け止めるならば、陶冶概念がこれらを接続しているという解釈は、全く成り立ち得ないことになる。

以上のマクダウェルの言葉に触れるとき、我々は、陶冶概念を手がかりに、第一の自然と第二の自然がいかにして接続されるかを明らかにする、という方針を放棄せざるを得なくなる。このとき、それでもなお陶冶が何らかの役割を持つとすれば、それは概念能力に関わり、かつ自然的である、ということ以外にはないのである。

上のことは、マクダウェルがライトの批判をかわすことができない、ということの意味するのであろうか。そうではない、と私は答えたい。このことは、マクダウェルの静寂主義的な態度に着目することで明らかになる。マクダウェルは、ライトに回答して次のように述べている。

第二の自然の概念が問題ないものだということがひとたび思い起こされたならば、近代が到

³ ハルビッチはこの議論を構築するにあたって、『心と世界』よりむしろ、McDowell ([1996] 1998) での議論に依拠している。

達したものに適切に敬意をはらうことでわれわれに強いられる自然のいかなる観念からも、規範的な語りが決して圧力にさらされるようにはならない、というのが私の考えである。
(McDowell 2002, 290-291)

この引用から読み取れるのは、マクダウェルにとって、「第二の自然」は説明され正当化されるべきものではなく、ただそれが問題ないものだということが思い起こされるだけでよいものだ、ということである。ここには、マクダウェルの静寂主義的な傾向、すなわち、問いそれ自体が不適切な源泉から発していることを指摘することで問いそのものの解消を目指す、という傾向が見て取れる⁴。ライトの批判は、「第二の自然が自然的であることはいかにして説明されるのか」という問いに答えるよう、マクダウェルに迫る。この批判に対してマクダウェルは、そうした問いの立て方それ自体が不適切な問いなのだ、と答えるのである。

このように、マクダウェルの静寂主義的な態度に着目することで、彼がライトの批判をかわす際の方針を理解することができる。しかし、ライトの問いは、なぜ不適切で、治療が必要なものだと言われるのだろうか。言い換えると、「第二の自然はいかなる意味で自然か」という問いは、いかなる不適切な源泉に由来するのであろうか。

マクダウェル自身は明確に指摘していないが、この問いの不適切さの原因はおそらく、この問いが「自然的である」ことを「法則の領域と適切な仕方に関わる」ことと同一視する態度を前提していることに求められる。第二の自然はいかなる意味で自然であるのか、言い換えると、第二の自然と法則の領域との間には、どのような適切な関係があるのか、という問いが提出されることになるのは、「自然的であることは法則の領域と適切な仕方に関わることである」という前提を置く場合に限られるからである。このような前提に対して、マクダウェルはアリストテレスの「第二の自然」という言葉遣いを思い出せ、そこでは自然であるということは、ことさらに法則の領域と関係づけて理解される必要はなかったはずだ、と訴えるのである。

この指摘は、簡素な自然主義や非法則的一元論に対する批判と同様のものである。いずれの立場も、自然的であることと法則の領域にあることを同一と見なすことから出発する。このため、概念能力はいかにして自然化されるのかというパズルが出現することになる。ライトがマクダウェルに突きつけた問いも、この系譜に属する。また、結果としてこの立場では、自発性が独特のものであることを認めることができなくなる。

以上の議論は、確かにある種の自然主義者、すなわち、まさにマクダウェルが指摘するような

⁴ マクダウェルのこの傾向について、de Gaynesford (2004, 14-7)、並びに岡本 (2012, 157-61) を参照。ただし、両者には、後者が「治療」の比喩を強調するのに対して、前者は治療ではなく「結び目を解く」という比喩によってマクダウェルを理解することを推奨しているという違いがある。

仕方、自然であることと法則の領域にあることを同一視することからパズルを組み立てる自然主義者には有効である。しかし、私は、この議論によっても、マクダウェルの立場は十分に正当化されないと考える。最後にこの点について、節を改めて論じることにしよう。

V 物理主義における自然概念

前節まで、マクダウェルの議論を再構成し、それがどこまで批判に耐えうるものであるかを検討してきた。マクダウェルは、自発性と受容性が概念能力を構成する分離不可能な契機であること、概念能力が法則の領域に位置を持たない独特のものであること、概念能力が自然的なものであること、これらのことを受け入れることができる立場として、第二の自然の自然主義を提唱する。この立場において、特に彼が「簡素な自然主義」と呼ぶ、概念能力の自然化を試みる立場は、自然的であることと法則の領域と適切に関連することを同一視するという誤った前提に由来する、不適切なパズルに取り組んでいると批判されることになる。

本節で私が論じるのは、上の批判は自然主義に対する誤解に基づいているのではないか、ということである。このことは、物理主義の定式化を試みた J. ポーランドの議論を見ることで明らかになる。

ポーランドは、物理主義の有効範囲はどこまでか、言い換えると、物理主義において「物理的である」と理解されることになるのはどのような対象か、という問いを立て、次のように論じる。

物理的、化学的、生物学的な現象に加えて、物理主義の命題は心理学的、社会的、道徳的、美的な現象や、われわれが日常経験する常識的な世界に関わる。しかし、ひとつ限定が導入されている。われわれは、そのテーゼが自然の秩序、われわれがそこで生活し、それと相互作用する宇宙にのみ関わる、と理解するべきである。(Poland 1994, 227)

さらに彼はこのことを敷衍して、次のように述べる。

物理主義は、自然の中に存在するものに関わる(あるいは、そうあるべきである) [.....] だからこそ、幽霊、神、超常的なもの(paranormal)が、物理主義に対する真正の脅威となるのである。すなわちそれらは、様々な仕方自然の中に存在するように思えるのだが、物理学によっては扱うことができない。(Poland 1994, 228)

われわれにとって重要なのは、彼が「心理学的、社会的、道徳的、美的な現象」や、「幽霊、神、超常的なもの」について、それを「自然的」と認めることから出発しているということであ

る。物理主義者が取り組むのは、それが科学によって説明されるか否かに関わらず自然的なものである、ということを一とまず認めた上で、それを物理的なものと関連付けて説明しようと試みることである。

私には、ここにマクダウェルが指摘するような不適切な問題設定は存在しないように思える。マクダウェルが批判する自然主義者は、「自然的であること」と「法則の領域と適切に関わること」が同じことであると不用意に前提した上で、概念能力がいかにして自然なものとして理解できるかを問うていた。ポーランドは、これと異なり、法則の領域に含まれること、ないし物理的なものと適切な関係に立っていることと、自然の秩序に含まれていることを、一旦は独立に理解することから出発している。そのうえで、自然の秩序に含まれるものが物理的なもの、法則の領域に含まれるものと適切な関係に立つという主張を正当化しようとするのが、ポーランドが定式化する物理主義的な態度である。このような物理主義者は、マクダウェルと同じ地点から出発して、異なる結論へと至っている。それゆえ、マクダウェルによる自然主義への批判は誤解に基づいており、物理主義それ自体を主題化した上でその正当性を主張する論者に対しては有効ではない。

さらに言うなら、物理主義の立場からは、マクダウェルの立場にこそ、治療が必要だと指摘できるかもしれない。マクダウェルは、概念能力は独特のものであるという不適切な前提に由来するパズルを解くために、「第二の自然」という不可解な観念に訴えているように思えるからである。

VI 結論

本稿では、まず、マクダウェルの第二の自然の自然主義が、彼の批判する過激なプラトン主義、簡素な自然主義、非法則的一元論の各々とのどのような関係に立っているかを明らかにした。さらに、この第二の自然の自然主義が、彼の静寂主義的な態度に根ざした自然主義批判として整理できることを示した。最後に、マクダウェルの批判が、自然主義というプロジェクトに対する不適切な理解に基づいているということを指摘した。

マクダウェルの批判は、自然的であることと、法則の領域に位置を持つことを同一視することから出発するタイプの自然主義に対しては有効に機能するかもしれない。しかし、これを前提するのではなく、そのこと自体を論証しようとするタイプの自然主義者に対しては無効である。マクダウェルやその擁護者は、後者のタイプの自然主義に対して、それが別の不適切な前提に由来する不適切なプロジェクトであることを示すか、あるいは、正面からそれを論駁するか、いずれかを為さなければならないであろう。また、おそらくは彼のセラーズ解釈に由来する、概念能力は「独特の」ものであるという主張が、正当なものであることをより説得的に論じることが必要であろう。他方、自然主義者の側も、マクダウェルの批判を受け止め、自然的であることと法則の領域に位置を持つことを同一視してよいという主張の正当性それ自体を再考する必要がある

だろう。

参考文献

- Barnstein, Richard J. 2002. "McDowell's Domesticated Hegelianism," in: Lindgaard(2008), pp. 9-24.
- Davidson, Donald. (1970) 2001, "Mental Events," in: Donald Davidson, *Essays on Actions and Events*, Oxford University Press, Second Edition, 2001, pp. 207-225.
- Fink, Hans. 2008. "Three Sorts of Naturalism," in: Lindgaard(2008), pp. 52-71.
- de Gaynesford, Maximilian. 2004. *John McDowell*, Polity Press.
- Halbig, Christoph. 2008. "Varieties on Nature in Hegel and McDowell," in: Lindgaard(2008), pp. 72-91.
- Lindgaard, Jakob(ed.). 2008. *John McDowell: Experience, Norm, and Nature*, Blackwell.
- 松岡健一郎. 2017. 「現代の英米哲学—ホネットからマクダウェルへ」、寄川条路(編著)、『ヘーゲルと現代思想』、晃洋書房、2017年、第3章、pp. 93-108.
- McDowell, John. 1994. *Mind and World: With a New Introduction by the Author*, Harvard University Press(=MW).
- . (1985) 1998. "Functionalism and Anomalous Monism," in: McDowell(1998), pp. 325-340.
- . (1996) 1998. "Two Sorts of Naturalism," in: McDowell(1998), pp. 167-197.
- . 1998. *Mind, Value, and Reality*, Harvard University Press.
- . 2002. "Resposes," in: Smith(2002), pp. 269-305.
- . 2008. "Resposes," in: Lindgaard(2008), pp. 200-267.
- . (2003) 2009. "The Apperceptive I and the Empirical Self: Towards a Heterodox Reading of "Lordship and Bondage" in Hegel's *Phenomenology*," in: McDowell(2009), pp. 147-165.
- . (2008) 2009. "Towards a Reading of Hegel on Action in the "Reason" Chapter of the *Phenomenology*," in: McDowell(2009), pp. 166-184.
- . 2009. *Having the World in View: Essays on Kant, Hegel, and Sellars*, Harvard University Press.
- 岡本裕一郎. 2012. 『ネオ・プラグマティズムとは何か——ポスト分析哲学の新展開——』、ナカニシヤ出版.
- Poland, Jeffrey. 1994. *Physicalism: The Philosophical Foundations*, Oxford University Press.
- Smith, Nicholas H. (ed.). 2002. *Reading McDowell: On Mind and World*, Routledge.
- Wright, Crispin. 2002. "Human Nature?," in: Smith(2002), pp. 140-159.

